

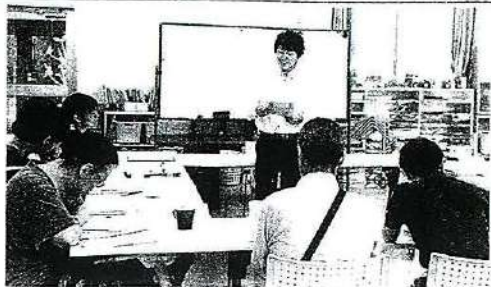
社会復帰へ地域と連携

精神科病院は、一度入院して慢性化する
と、退院して地域で暮らすことが難しいと
されてきた。退院後の行き場がなくなったり、
長い入院生活で生活能力が低下したりする
ためで、患者の6割が1年以上の長期入院
だ。地域の支援者と協力し、この課題に向
き合う病院の取り組みを取材した。



■自信が持てない

統合失調症を患う30歳代の男
性は昨年12月、福岡市早良区の
油山病院から同市内のアパート
へ移った。人生初の一人暮らし。
洗濯機や棚、皿など、必要なも
のはリサイクルショップや10
0円ショップでそろえた。
入院生活は、4年10か月に及



退院を目指す患者が集まる油山病院のチャレンジグループ。この日は南区第2障がい者基幹相談支援センターの村中さん(奥)が講師を務めた(9月19日)

精神科からの退院

んだ。強い不安にさいなまれ、
周りの言動に敏感になり夜も眠
れない。一時は混乱が激しく保
護室に入るまで苦しんだが、薬
物療法や静かな環境での療養
で、少しずつ回復していた。
一方、弱さも感じていた。
病棟は夜9時に消灯し、空腹で
も我慢するしかない。「ルール
に縛られて好きなことができな
い」と退院を考えたが、家庭の
事情で実家には帰れない。一人
で生活リズムが保てるのか。不
安に舞われたらどうするか。
男性は自信が持てずにいる。

■生活のコツを学ぶ

同病院のスタッフは、201
5年に院内にもうけた「チャレ
ンジグループ」に男性を誘った。
退院を目指す患者が集まる半年
間のプログラムで、お金の薬の
管理、調理など生活のコツを学
び、パスで進出もした。

特色は、地域の支援者を招き
入れたことだ。同市の委託を受
ける南区第2障がい者基幹相談
支援センターの村中貴輝さん
(29)もその一人。「不安になっ
たら話を聞いてほしい」と吐露
した男性に、村中さんは「いつ
でも電話していいよ」と声をか
けた。

男性は、こつとして少しずつ前向
きになり、退院を決意。部屋探
しは2軒断られるなど難航した
が、同病院が信頼関係を築いて
いた不動産業者が部屋を紹介し
てくれた。

現在は週一回、ヘルパーや看

護師の訪問を受け、不安が募っ
たときは村中さんの電話番号を
押す。「朝起こしてくれる人も
いない。ご飯も出てこない。だ
けど、いつ何をやるかは自分で
決められる。自己責任と自己決
定だと思っ」。男性は、自立し
た実感をかみしめるように言葉
を繰り返した。

■「脱施設化」に遅れ

14年の精神病床の入院患者は
全国に約29万人。このうち約18
万人が1年以上、約10万人が5
年以上の長期入院だ。国は「入
院から地域へ」との理念を抱け
るが、経済協力開発機構(OE
CD)は他の先進国で進む「脱
施設化」の遅れを指摘している。

同病院はこの10年、訪問看護
の体制を整えるなどして退院支
援に力を入れてきた。ただ、患
者本人が退院をためらうケース
もあり、チャレンジグループを
始めた。2年間で4人が社会復
帰を果たしたという。

同病院地域医療連携部の内野
秀雄係長(43)は「病院は退院を
目標と考えるが、患者さんには
その後の生活が重要。病院と地
域が連携して、スムーズな橋渡
しができれば、より退院が進む
のでは」と話す。(手嶋由梨)

◇ 次回は15日掲載予定です。

「すこやかカフェ」へのご意見お
問い合わせは、読売新聞西部本社社
会部(ファクス092-717-1555
06)メール:syaka@yomiu
ri.com)。